

森村 ここで皆さんからのコメントや質問を伺いたいと思います。これまでのコメント等と全然関係ないような質問でも一向に構いません。どなたかいらっしゃいませんか。

藤本 内藤さんと平石さんに興味があってお伺いしたいのですが、伊藤君のレジュメの2ページ目の一番右にある「タイムスケールの違い」ということについての批判はお2人とも触れられていなかったように思いますが、その辺はどう考えていらっしゃるのかお聞かせ願えればと思います。

内藤 タイムスケール、ここに書いてある趣旨もあまりよくわからなかったのですが、「道徳を生物進化のアナロジーに依拠する道徳理論に批判が向けられる生物進化のスピードと文化／文明」、スピードが違うのはわかるんですけども、それがどうなのかよくわからない。

藤本 生物進化のスピードに関する適応性というものの概念も文化／文明の変化のスピードという全然違うところに持ち込んで、人間の発展とか文化の発展というものに持ち込んでいっているのかどうか、ということだと思います。

内藤 持ち込むというのが具体的にどういうことを指しているのかということが疑問なんですけど、とりあえず答えれば、生物進化と文化／文明を二つ（直接対比して）置いて、どっちをどっちに適応すると考えるからわからなくなる話なんで、間に人間の心を挟めば話は簡単で、生物進化でもってつくられた人間の心があって、その心にはいろいろなディテールはあるけれども、根本のところはグランドデザインが根っここのところにありますよというのが私とか生物学の主張です。その上で、そこからディテールとして文化が出てくるとか、そういう人間が文化をつくるとか、そういう中でいろいろな制度をつくるというのが当然あるわけですけども、そのもとのところは何かということを見るときに生物進化をとってくるというのが私の議論です。

平石 僕もここがいまいち「外在主義」とか言われた途端に、なれていない単語なので正直、思考停止に陥るんですけど、内藤さんがおっしゃっていることはそのとおりだと思いますね。別に生物進化だからと固定的になる話ではないということで、それは別に人間に限った話ではなくて、例えば魚の世界でも、もてるオスがもてるという現象があるんです。人間が人工的に水槽の中で、あるオスの近くにメスが近くにいざるを得ないように透明なスリットを入れて、あるオスの近くには絶対メスがいないような状況をつくると、ほかのメスが見てやってきて、そのオスはモテモテになるというのがあるわけです。

それは要するにある意味、文化的変化ですね。あるオスがもてるかどうかというのが短いスパンで変わっているわけですから、でもそれは別に自然淘汰の話に全然矛盾することではなくて、メスにとっては、ほかのメスを選んでいいるオスを選ぶということは、いいオスを選ぶ上で手堅い戦略で昔うまくやってこれたからそうやっていると。ところが人工的にそんなふうにやられるなんて状況は想定していないから、その場合には間違った戦略をしちゃうこともあるということがああるわけです。だから、そこは矛盾した話なのかなという感じですけども。（質問に対して）全然違うことを答えているのかもしれないという不

安もないわけではないです。

森村 伊藤君から何かコメントはありますか。

伊藤 言いわけと質問、両方ですけども、言いわけが一つ、言語的コミュニケーションの話はちょっとサーベイ不足で、Davidson はスーパードッグとか、宇宙からやってきた犬の議論とかやって、言語的コミュニケーションの話をしている。Davidson はもう少し正規な議論をしていて、一つ平石さんが言っていたのは、知性が言語コミュニケーションと空間的コミュニケーションに分かれるとして。

平石 コミュニケーションではなくて知性。

伊藤 失礼。言語的知性と空間的な知性に分かれるとして、空間的知性だけで道徳的な概念が生まれるのかというのが一つの疑問です。

平石 それはそうですね。

伊藤 もう一つ気になったのは、先ほど内藤さんが動機づけの問題と正当性の問題のギャップにそれほど悩んでいない。動機づけから逆に正当性の問題を訴えたいんだとおっしゃっていた、内藤さんの頭の中にはそもそものその主張された根拠は内井惣七さんの議論が前提にあるということなんでしょうか。

内藤 ちょっと趣旨がよくわからない。

伊藤 要するに動機づけという事実のレベルの問題から、正当性という規範の問題を訴えたいのだという内藤さんの意図があるような感じがして、その動機づけの問題からストレートに正当性の問題が出てくるのだという内藤さんの主張の背景には、内井さんの議論が基本的には正しいのだという前提があるからなんでしょうか。

内藤 前提にあるのかと言われたら、あまりあるつもりはない。

伊藤 もう一つ気になったのは、マルクス主義と社会契約論がそもそも言語や思考の暴走なのだという話をされていて、僕は繁殖概念がもうちょっと広い、あまり規範的には役立たない、著書を読んでいて広い概念のような気がしていて、さっきの内藤さんの話を聞いていると、繁殖が規範的な問題になっていて、例えば動物の権利なんて人権には全く関係ない。人権はマイノリティの権利というよりは一般人類そのものに妥当するようなものを主張していきたい。繁殖の概念でそういう繁殖には役立たないものを切っていこうという意図もあるわけですね。繁殖概念に役立たない規範理論はすべて否定したいと。

内藤 否定したくない。

伊藤 否定したくない？

内藤 はい。これは人権論の話だからカテゴリーが違うという話で、別に繁殖に関係ない資源獲得に関係ない話でも、例えば王冠集めのマニアの間でどういう方法で王冠を集めるのがいいか悪いかという議論がネット上でされているというのは、それはそれでありだと思いますし、それを規範的に根拠づけるというのもありだと思うけれども、人権論ではないという意味です。だから繁殖に関係ないことは否定するとかそういうことではなくて、少なくともテーマ設定としてすべての人間が持つという——それは人権の定義で、そうい

う定義されている人権を扱うときに、その正当化の議論をするときに、私が言っているような生存繁殖及びその他の資源獲得というのを人間の目的として特定して、それを集団生活のもとでだれにとっても利益的になるように位置づけする方法として正当化するという議論は成り立ちますよねという話で、ほかの議論は違う形で違うカテゴリーで論ずればいいという話です。ただそれに対しても、ここで使ったアイデアは使えるのではないかと思います。

森村 ほかに発言なさりたい方はいませんか。

水林 繁殖をしたいという個々の欲望が例えば一夫一婦制という今日（こんにち）のシステムというのに非常に制約的に働く場面というのがありますよね。その辺はどういうふうになるんですか。

内藤 一夫一婦制はこの本の中で論じているのでそれを参照していただきたいのですが、まず前提として、繁殖したい欲求（欲望）と言われましたけれども、別に私はそういう欲求を（誰もが）持っているというふうに言っているわけではなくて、世の中には繁殖なんかしたくないという人もいらっしゃいますし、実際私も子供ができるまではそう思っていましたので（笑）、別に繁殖したいという欲求があるということを言っているわけではなくて、僕も子供なんかできるよりも、その分研究するとか、自分の好きなテレビを見るとか何とかのほう欲求としてはあったんですけども、しかし、本人はどういう欲求を持とうが、人間の心のメカニズムは結局そこに向かっていくから、そういう形で人間を認識することができますよということがまず前提です。

それで一夫一婦制がそれに対する制限になるじゃないかということに関しては、まさにおっしゃるとおりなんですけど、そういう場合に、では制限なしに好きなようにやってください、王様はたくさん女性をかつさらっていきます、下の人たちはそういうことはできませんよとなったときに、絶対に下のほうの人たちは、その集団にいて、自分たちに繁殖の可能性がなくなるわけですから、そんなのではやってられんということを言い出す。文句を言うとか、抵抗するとか、反乱するとか、場合によっては集団から出ていってしまったりするので、一夫一婦という厳密な形がいいかどうかは別として、少なくとも配偶者の獲得機会を集団の中で保障することが集団全体の安定にとってはよくて、そのことが結局、王様とか上のほうの人にとってもプラスになりますよというのが私の議論です。

ですから一夫一婦制というのが一見繁殖とか自分の利益を否定しているようだけど、実はそういうレベルで見たときに、ほらね、王様だって、あなたが資源獲得していく上でそうしたほうが得でしょうというのが私の正当化の根拠になる。

水林 そういう議論が内藤さんの事実に基づいて規範というものがうまく説明できるんだというそのレベルの議論なのか。それとも今言った説明は、歴史がそのように変化してきたことをそのように説明できるという議論なのか。どっちの議論をしているんですか。

内藤 それで言ったら前者だと思います。

水林 内藤さんのご議論をずっと読んでいないわけではないので、今日の古茂田先生の要

約で2枚目のレジュメの上のほうに「第5章第6章は、個々人が繁殖欲求（無意識）を持って争い合う中で、いかにしてその繁殖機会配分の……」云々というところで、歴史の変化が奴隷制から奴隷解放で云々という説明をなさっていますが、このような説明だと歴史の説明としては非常に架空の説明だと思うんですよ。つまり事実と事実を並べたときに、その因果連関とかそういうものを説明する論理としては、とてもそのようにはなっていない。このように解釈することによって一つのドグマをつくるという議論に逆に見えてくるものだから、さっき言ったような質問をしたんです。

内藤 さっき言おうと思って忘れてしまったところですが、ここの古茂田先生の人類学的・歴史的回顧になっているということに関しては反対で、回顧しているつもりはない。そして格差是正がなされてきたという事実に関する説明だとも思ってなくて、本章で挙げたような奴隷制とか市民革命の例で見るように、これはあくまで例なので、そういう例で見るように、繁殖機会の配分ということをしたら、みんなの利益になるでしょう、集団が安定的に存続できるでしょうということの正当化根拠の例として事実から引っ張ってきているというので、あくまで正当化の根拠の例として持ってきているので、それが歴史認識とか歴史的な説明として私がそうしているというのではないです。

水林 だけど、それは私のように見る可能性もありますよ。例えば奴隷制からそれじゃない世界に行った逆の例はないとか、そういうことは言われているわけで、だからやっぱりある種の歴史のテンデンス（tendency）ということは言っておられると思いますけれども、逆の例はありますよ。

その話は別にして、大きく見れば、ある社会が奴隷制に戻っていくとか、短期的なスパンではなくて長期的にはそうだし、あるいは多分、一夫一婦制についてもそういう言及があったと思います。全体的にだんだんハーレム社会になっていくということはないというふうに。だから全然歴史的な回顧ではないとおっしゃるのは強過ぎて、正当化論理もあるけれども、ある種の歴史哲学を言っておられるような印象で、それほど私が乱暴な読み方をしたわけではないと思いますけれどもね。

内藤 強過ぎると言われると確かにそうかもしれないですが、奴隷制とか何とかがそういう流れになっているということを正当化の根拠にしたということです。水林先生もおっしゃったけど、そうじゃない凡例もたくさんあるので、それを持ってきたと。だから強過ぎるというのは確かにそうです。

平石 もっと細かいところで一夫一婦制のことについて言えば、これは人類学者とかが言っていることですが、人間の基本的な行動原理は恐らく一夫一婦制だろうというふうに言うんですね。繁殖を制限すると言いましたけれども、それは男の視点であって、女の視点から言えば一夫一婦制のほうがいいわけですよ。

というのは、人間の赤ん坊はものすごく脆弱な姿で生まれてきますから、例えば生後半年の人間の赤ん坊は、はいはいできるかできないかぐらいのレベルです。赤ん坊は母親なり、だれか大人に抱っこしてもらわなければ移動ができないですけれども、チンパンジ

一は、人間の近縁と言いながら人間よりちょっと下だろうと人々が思っているあのチンパンジーですけれども、チンパンジーの半年の子供というのは、自分の力でお母さんの背中によじ登ってしっかりつかまることができます。お母さんは抱っこひもとかやる必要もないし、抱っこする必要もなく移動できるわけです。両手両足を使って移動もできるし、両手を使って物をとることもできる。人間よりも全然成長しているわけです。人間の赤ん坊というのはそんなふうになっていない。

何でかという、恐らく一つは直立二足歩行することで産道が狭くなった。一方で人間というのは大脳化が進んで、頭がでかくなってしまったので小さく産まないと産めないわけです。だから小さく産むというのが人間にあるだろう。そうするとどうなるか。育てるのが大変なので、母親ひとりでは育てられないわけです。

男から見れば確かに浮気してあちこちでやればいいよねという話ですけれども、女性の側からすれば、妊娠しているときに夫がどこか行っちゃったら困るわけですから、行っちゃいそうな男を引きとめるということは工作として当然やるわけです。数としては半々ですし、男としては女性がいなければ、そもそも子供は残せないわけですから、女性のほうの要求にある程度従わざるを得ない。得ないという、嫌々僕も子育てしているみたいですけど、ひょっとしてそういうのがパラッと出たのかわからない（笑）、ないつもりですけども、そういうことがありますから、原則としては恐らく一夫一婦だろう。

ではなぜ一夫多妻が出てきたのか。それは1人の男性と、ごく少数の人物のところに富が集積することが可能になったからで、極端なハーレムが出るようになったのは農耕牧畜が始まって以降であろうということが一般的に言われています。それ以前の社会では、確かに狩りが、よりうまくて、何人か多くの妻を持つような男性もいないわけではないですよ。3人とか4人の妻を同時に持つ男性が全くいないわけではないですけども、原則としては一夫一婦というのがヒトのパターンであるだろうと言われている。

水林 歴史的には日本はそうではないね。だって一夫一婦制というのは……。

平石 歴史というのをどこから考えるかです。僕が考えているのは、少なくともホモサピエンスというものが地球上に出てきた20万年前からの話をしているので。

水林 僕は日本の歴史について見ると、平安時代ぐらいから夫婦というものは同居するということが普通になってくるけれども、それ以前は男は女のもとに通うという形態が普遍的であって、何か一対のものが常に一緒に生活してということが、事実状態としても——そういう場合もあったかもしれないけれども——普遍的ではないし、規範としてもないと、そういうことを言いたい。

森村 申しわけありませんけれども、時間も10分ほど過ぎましたので、ここで終わりにさせていただきますと思います。第1回は3人の報告がありましたけれども、それぞれ活発なディスカッションもありまして、幸先のいい出発ができたのではないかと思います。参加していただいた皆様、ありがとうございました。（拍手）